

## 第14回腸内細菌学会を終えて

財団法人日本ビフィズス菌センター  
第14回腸内細菌学会会長  
森下仁丹(株) バイオファーマ研究所 所長  
浅田雅宣

第14回腸内細菌学会は、腸内細菌と健康や医療との関連に焦点を当て「腸内細菌研究の新たな飛翔—健康増進と疾病予防を目指して」をメインテーマに2010年6月17, 18日の2日間、改装された京都大学百周年時計台記念館において開催されました。今大会は当財団設立30周年の記念事業の一環として、初めて関西で開催されましたが、300名超の参加があり、盛会の内に終了しました。

第1日目は、一般演題として20題の最新の研究成果が発表され、例年通り活発な質疑応答がなされました。発表内容は、ビフィズス菌の母子伝播、便中の菌の定量、菌叢解析、免疫、アレルギー、腸内代謝物、ビフィズス菌・乳酸菌の形質転換、生体への効果（糖尿病、血液透析、感染症、疾病症状軽減）に渡って幅広いものでした。続いて、若手研究者に対する日本ビフィズス菌センター研究奨励賞授賞式が行われ、今年も2件の優秀な研究に対する授賞と受賞講演が行われました。さらに、翌日のシンポジウムの基調講演として理化学研究所のS. Fagarasan先生に、腸管内IgA産生：腸管内の微生物コミュニティを調節する適応免疫という内容の最新の知見を紹介して頂きました。その後の参加者の親睦を深め交流の輪を広げる懇親会は、本会では初めてのテーブルを順に移動していくユニークな名刺交換会とし、過去最高の参加者数となりました。多くの方々から交流の輪が広がって良かったとの感想を頂き、この懇親会を企画したものとして喜んでおります。

第2日目は、シンポジウムと特別講演がおこなわれました。日本乳酸菌学会の会員の方の参加を容易にするため、初めて乳酸菌学会と共同開催したシンポジウムは、「ビフィズス菌、乳酸菌の医療への新展開」というテーマで6名の第一線の先生方に積極的な臨床応用を目指した研究成果をご講演いただきました。午前中のPart1の2題のご講演は乳酸菌学会から推薦された先生方が、腸管免疫系のビフィズス菌や乳酸菌の刺激に対する応答性についての解説とタンナーゼ活性を有する乳酸菌を利用した新規プロバイオティクスの開発についての解説をされました。

その後、本庶佑先生による「抗体記憶とゲノム不安定性」と題した特別講演が行われました。ワクチンにつながる抗体記憶とゲノムの不安定性を多くの実験データを交えて解説され、ヒトは遺伝子の再構成により病原体から身を守ってきたということをお話しされました。講演後には質問も受けて下さり、感銘深い特別講演となりました。

シンポジウムのPart2とPart3では最先端の医療現場でのプロバイオティクスの応用研究や遺伝子組換えビフィズス菌の癌治療への試みなど、意表を突くアイデアの研究が紹介され、参加者から早期の実用化が待たれるとのコメントもありました。

今大会で腸内細菌研究の原点である健康と疾病に焦点を当てたことは時宜を得たものであり、参加した研究者に最新の知見が紹介され、理解を深めて頂くことに貢献できたのでは無いかと思います。今後は、これらの研究成果の一般の方々への周知が課題と思われま。

今大会開催までに支援して下さった多くの方々へ感謝の意を表し、参加者から評判の良かった休憩室の飲料、商品と懇親会の酒類をご提供頂いた企業の方々には厚くお礼申し上げます。最後に、来年度の30周年記念大会は東京で開催されますが、多くの方の参加をお願いし、今年度の大会長の挨拶とさせていただきます。